

大量殺傷犯人の属性と犯行パターン(1)日本における大量殺傷事件の類型

越智, 啓太 / KIDO, Mayumi / OCHI, Keita / 木戸, 麻由美

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

62

(開始ページ / Start Page)

113

(終了ページ / End Page)

124

(発行年 / Year)

2011-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007587>

大量殺傷犯人の属性と犯行パターン (1)

日本における大量殺傷事件の類型

越智 啓太・木戸 麻由美

要 旨

本研究では、大量殺傷事件の犯行形態と犯人の属性について検討した。大量殺傷事件に関する先行研究を検討した後、日本の大量殺傷事件について分析した。1974年～2009年に発生した77件の大量殺傷事件を多次元尺度構成法を用いて2次元空間上にプロットした。その結果、大量殺傷事件は、無差別殺傷・強盗殺人型、一家心中型、凶悪犯罪型の3つに分類されることが示された。

1. 問 題

2008年6月8日午後0時30分過ぎ、東京都千代田区外神田4丁目JR秋葉原駅前の歩行者天国に、2トントラックが突っ込んだ。トラックは通行人5名を轢いた後、タクシーと接触して停止した。その後、運転していた男は車から飛び出して、奇声を上げながら自分が轢いた被害者や周囲の通行人を次々に刺しはじめた。最終的に犯人は警察官によって取り押さえられたが、この事件で7人が死亡し、10人が負傷した。

いわゆる「秋葉原通り魔事件」である。我が国は治安がよい国として世界的にも有名であるが、その我が国においても、このようなタイプの事件の発生は少なくない。1999年、池袋の東急ハズ前で包丁と金づちを持った犯人が2名の通行人を殺害し、6名を負傷させた事件、2001年、大阪教育大学附属池田小学校に男が侵入し、児童8名を殺害し、教員と生徒15名を負傷させた事件、2005年、仙台駅前のクリスロード商店街で、車を暴走させ、通行人3名を殺害し、4名を負傷させた事件などが発生している。

もちろん、このような事件は海外でも多く発生

している。アメリカでは、1999年のコロンバイン高校銃乱射事件、2007年のバージニア工科大学銃乱射事件や、1991年カリフォルニア州のカフェで銃を乱射して24人を殺害したGeorge Hennard事件、オーストラリアでは、1996年タスマニア、ポートアーサーで35人を殺害し、25名を負傷させたMartin Bryant事件、イギリスでは、1987年ハンガーフォートの町で戦闘服に身を包んだ犯人が銃を乱射し、16名が射殺され14名が負傷したMichel Ryan事件などが有名である。

これらの犯罪は、大量殺傷 (mass murder) と呼ばれる。同一犯人が時間間隔を空けて複数の被害者を殺傷する連続殺傷 (serial murder) に対して、同一時間帯、同一場所でひとりの犯人が多数の無関係な人を殺害するという特徴をもつ (Holmes & Holmes, 2001; Bowers, Holmes, & Rhom, 2009)。大量殺傷は、被害者やその関係者だけでなく、多くの人々や社会全体に大変なショックをもたらすものである。そのため、このような事件がなぜ、どのような動機で発生するのか、あるいは犯人はどのような行動をするのか、それを防ぐためにはどのようにすればよいのか、などについて研究していくことが必要になってくる。

そこで本研究ではこれらの問題を明らかにするための最初のステップとして、大量殺傷事件を実証的な観点からいくつかの下位カテゴリーに分類することを試みたいと思う。

2. 大量殺傷の分類研究

さて、大量殺傷事件やそこにおける犯人の行動を分類する研究は今までも行われてきた。初期の研究のひとつとして、あげられるのが Dietz (1986) である。彼は、大量殺傷を、Family annihilators (家族皆殺し)、Pseudocommandos (特攻隊もどき)、Set-and-Run (セットアンドラン) の3つのタイプに分類した。Family annihilators は、自分の家族・親族を殺傷するタイプの事件、Pseudocommandos は、町中や職場などで銃を乱射するタイプの事件、Set-and-Run は、爆弾を仕掛けて逃走するといったテロ的なタイプの事件である。

この分類をより精緻にして、大量殺傷を8つに分類したのが、Holmes & Holmes (2001) である。彼の分類は以下の通りである。まず、The Disciple mass killer (師弟タイプ)。これは、チャールズ・マンソンファミリーや日本でいえば、オウム真理教の事件のように、ある人物に心酔した師弟が教祖などの命令や意向に従って大量殺傷を行うタイプである。The Family annihilator (家族皆殺しタイプ) は Dietz のものと同じであるが、自分の家族や親族を殺害するというタイプで一家心中を含む。The Disgruntled employee mass killer (不満を持った従業員タイプ) は、会社を解雇されたり、いじめを受けた人物が復讐のために社内で銃を乱射するなどして社員や会社に居合わせた人を大量殺傷するものである。The Disgruntled citizen mass killer (不満を持った市民タイプ) は、自分の境遇や社会一般への不満のために、繁華街や住宅街で無差別に殺傷を行うタイプである。The Ideological mass killer (イデオロギータイプ) は大量殺傷というよりはテロ行為であり、自らの政治的な信念のために大量殺傷を

行うものである。The Set-and-Run mass killer (セットアンドランタイプ) は、爆弾をしかけて逃走する犯人であり、動機は単なる好奇心からテロ的な信念までさまざまである。The Psychotic mass killer (精神疾患タイプ) は、精神疾患に起因する妄想や幻聴によって大量殺傷が引き起こされるタイプである。School shooter (学校内での銃乱射タイプ) は学校内での銃乱射であり、その学校の生徒によって引き起こされる。School shooter はひとつの分類ではあるが、その中には不満やストレスに基づく復讐のようなタイプもあるし、精神疾患のものもある。

また、Fox & Levin (2003) は犯人の動機に基づき、大量殺傷を復讐型 (revenge)、パワー型 (power)、誠実型 (loyalty)、利益型 (profit)、テロ型 (terror) の5つに分類している。「復讐型」は恨みを持っている個人や集団を対象として大量殺傷を行うパターンである。ただし、この場合、直接的に恨みを持っている相手を殺傷するのみでなく、恨みを持っている人間と同一視しているメンバーも殺傷する場合がある。たとえば、妻を憎んでいた場合、その兄弟や子どもなども拡大した「妻」として殺傷する。「パワー型」は自らの力を誇示する、あるいは抑圧され十分に発揮できなかった自己の力を一気に発揮する方法の一つとして大量殺傷を選ぶケースである。Fox & Levin (2003) は、コロンバイン高校の銃乱射事件をこの類型として分類している。「誠実型」は、一家皆殺し、一家心中の形で起こることが多く、犯人が家族を何らかの不幸から救おうという動機（この思い込みは自分勝手なものであるのだが）で殺害するものである。たとえば、1991年 James Colbert は、自分の妻を殺害してしまったが、自分が逮捕されてしまえば、自分の娘たちが孤児になってしまうということから、3人の娘を殺害した。これがひとつのパターンである。「利益型」は、強盗殺傷事件である。押し入った家や店に居合わせた人々を殺害して財物を奪うなどのケースである。最後に「テロ型」は、殺害を通して、多くの人に何らかの政治的、宗教的なメッセージを送るための手段と

して大量殺傷を犯す場合である。

影山 (2008) は、大量殺傷事件の中でも特に無差別大量殺傷事件について分析し、犯人の精神医学的特性からそれを「自己確認型」、「間接自殺型」、「自暴自棄型」という3つのタイプに分類している。「自己確認型」は、挫折した自己の存在感の回復、万能感の回復、力の誇示などに動機づけられ、自殺企図のないものであり、「間接自殺型」は、自殺願望があり、自分を死刑にしてもらいたいがために、殺人を犯すものである。「自暴自棄型」は、嫉妬や復讐や不満から激情的に行う大量殺傷である。なお、彼は、「自己確認型」をさらに「空虚な自己」という基本心理に基づくⅠ型と、「幼児的万能感」に基づくⅡ型、これらが混合し、自己顕示的に行われるⅢ型に分類している。

ここであげた各分類はいずれも、データの解析によって示された分類というよりも各研究者が自らの経験に基づき、カテゴリーを設定したものである。これに対して、データ分析に基づいて客観的な分類を行った研究としては、渡邊ら (2008) のグループの研究がある。

彼女らは、我が国で発生した大量殺傷の特別捜査本部事件 181 件のデータについて、事件の構成要素や犯人の特性のデータを正準相関分析で分析し、3つのタイプを抽出した。第1のタイプは「親族型」である。この典型的な事例は次のようなものである。被害者は加害者の親族であり、子どもが被害者に含まれる場合がある。場所は被害者宅である。緊縛や窃取などが見られる場合は少ない。加害者は、同居か近くに居住しており、単独犯で30代から40代、主に夫婦間トラブルや無理心中が動機になっている。第2のタイプは「知人型」である。被害者は加害者の知人で、被害者宅あるいは被害者の会社で殺害が行われる。複数の凶器が用いられたり、窃取が行われたりするケースもある。共犯があることがあり、動機は男女関係や金銭貸借の問題である。犯人は前歴がある。第3のタイプは、「面識なし型」である。この事例では、被害者は加害者と事前の面識がなく、被害者の自宅が犯行現場となることが多い。窃取や緊縛、遺

体を屋外に遺棄するなどのことが行われる。動機は金銭奪取であり、犯人は20代から30代である。通り魔的犯行もこの中に含まれている。

本研究では渡邊らの研究と同様のデータ分析をもとにして、大量殺傷事件を分類することを試みる。

3. 日本における大量殺傷事件の分類

3-1. 本研究の目的

日本で発生した大量殺傷事件について多変量解析を用いて分類し、その類型を示す。

3-2. 定義

分析にあたり、まず、対象となる大量殺傷を定義する必要がある。一般には、大量殺人 (mass murder) とは、ひとり (あるいは少数) の犯人が、多数の被害者がある時間帯に、かつ、同じ場所で殺害するタイプの殺人の類型をさすとされる (Holmes & Holmes, 2001)。ただし、厳密に言えば、「多数」というのが何人以上なのか、「ある時間帯」というのはどのくらいの時間的な幅をとるのか、「同じ場所」というのは1カ所ではなくてはならないのか、それとも数カ所でも良いのかという点については、研究によって異なっており、厳密な定義はなかなか難しい。

人数に関していえば、アメリカ連邦捜査局 (FBI) 分類では、通常同時に4人以上の殺害を、Hickey (2010) や Holmes & Holmes (2001) の分類によれば、3人以上の殺害を大量殺人としている。ただし、本邦では同時に3人以上の殺人事件はかなりまれなので、多くの場合2人以上と定義される (渡邊ほか, 2008)。そこで本研究でもこれにならって、人数に関しては2人以上の殺害とすることにする。

次に「ある時間帯」である。連続殺人では、殺害と殺害の間に冷却期間と呼ばれる数日から数年にわたる期間が挟まるということが知られている。これに対して大量殺人ではこの冷却期間が存在しない。そこで本研究では、大量殺傷の時間的範囲として、1日以内と定義する。

最後に、「同じ場所」についてであるが、大量殺人犯人の中には殺傷を続けながら、ある程度の距離を移動するものは比較的多く見られる。また、大量殺傷行為に先立って、家族や友人を殺害するケースがあり、この場合、犯行地点はひとつの場所ではなくなる。たとえば、テキサス大学銃乱射事件の犯人 Charles Whitman は銃による大量殺傷に先立ち、2カ所で殺人事件を犯している。本研究においては、最終的に事件現場が複数になったとしても、少なくとも、ひとつの現場で複数（2人以上）の人を殺傷していること、「ひとつの現場」とは半径1km 以内の範囲と定義した。

3.3. データの収集

次に、以上のような定義に該当する事件のデータを収集することにした。朝日新聞、読売新聞、毎日新聞のオンラインデータベースを使用し、「殺人」、「大量」などをキーワードとし、上記の定義の条件に合う事件で、かつ犯人が検挙されているものの記事を収集した。収集範囲は1974年～2009年までの36年間である。その結果、77件の事件が抽出された。分析の対象となる事件とその簡単な概要を記した一覧表を Table.1 にあげる。

Table.1 本研究で分析対象とした大量殺傷事件とその概要

ケース番号	犯人の名前	事件概要
1	宅間守	2001年6月8日、小学校に侵入。児童ら8人を殺害、15人に重軽傷を負わせる。
2	加藤智大	2008年6月8日午後0時過ぎ、歩行者天国にトラックで突っ込み、歩行者をナイフで7名を刺殺。10人重軽傷。
3	岡田直人	1996年4月30日午前2時頃、別れ話のこじれで、社員寮に放火し、相手の夫と妻を刺殺し、長女を焼死させた。
4	諸留良利	2005年1月11日午後5時頃、自宅で、妻と子ども2人を殴打し殺害。
5	浜田美輝	1994年6月5日夜から朝にかけて、別れ話のこじれから相手宅に押し入り、家にいた3人の手や足を縛り刺殺。
6	小日向将人	2003年1月25日午後11時頃、暴力団男性がスナックで、一般市民など4人を射殺、2人が重傷を負った。
7	坂口実	2007年12月3日午前6時頃、恨みを持った一家を就寝中に襲い3人を刺殺。
8	飯嶋勝	2004年11月24日午前9時頃、自宅に引きこもっている事から口論になり、家族3人を殺害した。
9	清水英和	2004年2月24日朝、家族3人を包丁や木槌で殺害。家族間トラブルが引き金だと思われる。
10	藤間清波	1982年5月27日午後8時頃、知人とともに、交際を反対された女性の家に押し入り、3人を刺殺。
11	斎藤真弓	1998年6月1日未明、離婚を迫られ、将来を悲観し、子ども3人の首に電気コードなどを巻き付け殺害。
12	伊藤竜	1986年11月3日夜、妻と口論になり、妻と子どもを絞殺。その後、父と母を絞殺。
13	松井善代司	1994年2月13日午後10時、路上で女性を殺害した後、結婚に反対していた女性の両親をハンマーで殺害。
14	曹士春	1998年1月29日午後5時頃、通りがかりの小学生1人を刺殺、看護婦の女性に怪我をさせた。犯人は自殺。
15	手塚尻正一	1991年9月9日午後4時頃、家族3人の首を絞め殺害、実弟と焼身自殺を図ったが死に切れなかった。
16	東条和彦	1990年12月6日午後7時頃、恨みのあった女性に重傷を負わせ、男性を刃物で刺し死亡させた。
17	野本岩男	1994年10月29日午前、妻と子どもの首を絞め絞殺。遺体を海に捨てる。
18	西本晴芳	1992年7月10日午前8時頃、仕事上の恨みから3人射殺、1人に重傷を負わせた。
19	小嶋由紀	2006年10月6日未明、妻が無理心中を図り、夫と子どもと母の3人を杭で刺して殺害。容疑者も自殺。
20	ネベス	2006年12月18日午後9時過ぎ、男女関係のもつれなどで相手とその子ども2人を殺害。その後逃走。
21	及川和行	2001年8月8日夕方、金銭目当てで侵入した家にいた子ども3人を包丁で襲い、2人死亡。
22	中沢金次郎	1975年3月27日未明、金銭トラブルの相手が管理するアパートに放火。6人焼死、5人が負傷。
23	古沢友幸	2002年7月31日未明、離婚問題をめぐって、妻の両親と孫の3人が殺害され、元妻が監禁された。
24	川崎政則	2007年11月16日午前3時頃、金銭トラブルのあった家の被害者など3人を刺殺し、掘っていた穴に死体を遺棄。
25	尾子光明	2007年7月2日未明、無理心中を図り、家族3人を絞殺。本人は、服役中に自殺。
26	吉永安伸	2001年8月1日午後7時頃、自宅で両親を包丁で刺したのち、外に出て歩行者など4人を刺した。
27	伊東嘉信	2006年5月7日未明、恨みを持つ相手の家族の家に押し入り、2人を刃物で刺殺、1人に重傷を負わせた。
28	庄垣正雄	2005年8月14日午後、悪口を言われたと恨みを持ち、相手の家に侵入2人を刺し、別の被害者1人も刺した。
29	神乃浦一男	2000年11月22日夜、以前にトラブルがあった相手3人を銃で殺傷。1人死亡、2人重軽傷。
30	牧野正	1990年3月12日夕方、金銭目的で侵入した家の女性を殺害、他に2人に重軽傷を負わせた。

ケース番号	犯人の名前	事件概要
31	竹沢一二三	1993年8月28日未明、元妻をかくまったと勘違いし相手の男性宅に押し入り、男性とその妻を刺殺し放火。
32	少年	2008年1月9日深夜、19歳の少年が母と兄弟2人を刺殺、その後火を付けた。動機は不明。
33	名古圭志	2002年8月16日午前11時頃、兄の家で妻と長女2人を包丁で刺し、殺害。二男に重傷を負わせた。
34	藤岡治	1994年8月27日午前4時頃、男女関係のもつれから相手の家族など2人を刃物で殺害し、1人が重傷。
35	少年	1994年8月27日午前9時頃、乗組員の少年が船長など2人を刃物で刺して殺害、1人が怪我をした。
36	渡辺忠幸	1992年7月8日午後4時頃、強盗傷害で指名手配中の犯人が逃走中、警官2人が射殺され、主婦が重傷を負った。
37	山崎猛	1989年8月28日正午頃、恨みがあつた相手夫婦を刃物で刺し殺害、スーパーのアルバイトにも重傷を負わせた。
38	17歳少年	2003年2月14日午後、17歳の少年が包丁を持って小学校に侵入。教職員3人を刺した。
39	明山家二男	2002年12月15日午前0時過ぎ、家族2人を包丁で刺殺、1人に重傷を負わせた。統合失調症。
40	信州大学生	1990年2月17日午後3時過ぎ、信州大生が2人を殴打、1人に重傷を負わせた。
41	田辺昭明	2001年9月3日午前10時頃、立ち退きトラブルで、刃物で1人刺殺、2人にケガを負わせた。
42	高見素直	2009年7月5日午後4時頃、パチンコ店に放火、4人が死亡、19人が重軽傷を負った。借金を抱えて放火を決意。
43	樺沢利晴	1985年10月2日午後11時頃、おじに恨みをもっていたおじがおじとその妻を刺殺、1人に重傷を負わせた。
44	少年	1998年1月8日朝、包丁を持って外に飛び出し、幼稚園児や、その母、女子高生などを襲った。
45	中国人3人	2003年6月20日午前0時過ぎ、金銭目的で被害者宅に侵入、家にいた4人を絞殺。その後遺体を海中へ遺棄した。
46	小林光弘	2001年5月8日午前、強盗目的で消費者金融に押し入り、放火。5人を焼死させ、他4人に重軽傷を負わせた。
47	村田幹夫	2005年4月2日午前、借金を抱え無理心中を弟と共に謀り、家族5人を絞殺。幹夫自身は自殺未遂。
48	小川和弘	2008年10月1日午前1時頃、個室ビデオ店に放火。16人死亡、10人重軽傷。
49	上部康明	1999年9月29日夕方、車で駅構内の通行人らをはね、包丁で乗客らを切りつけた。3人が死亡12人が重軽傷。
50	林真須美	1998年7月25日、地元の夏祭りで振る舞うカレーにヒ素を入れ、4人が死亡した。(否認中)
51	造田博	1999年9月8日昼、包丁と金づちで通行人などを襲った。2人が死亡、6人が重軽傷を負った。
52	池田一通	1980年1月31日夕方、自宅で、斧で7人を殺害し3人に重軽傷を負わせた。その後自殺。無理心中。
53	渡辺純一	2004年10月14日、詐欺グループの仲間割りで、4人が集団リンチで死亡。その後死体を雑木林に埋めた。
54	山田吉孝	1989年9月3日午前10時頃、隣人トラブルから、住民2人を猟銃で射殺し、4人に重軽傷を負わせた。
55	吉好英明	1976年6月14日午後4時過ぎ、内妻と離婚するように妻の姉に迫られ、一家4人を包丁で刺して殺害。
56	徳永勅一	1974年3月6日午後3時頃、仕事上の恨みから相手の一家5人を殺害。
57	鈴木喜造	2008年6月28日未明、無理心中を図り、家族3人を殴打、本人も自殺未遂。
58	大浜松三	1974年8月28日午前9時頃、ピアノの音がやかましい近隣住民宅に侵入、家にいた3人を刃物で刺殺した。
59	太田勝憲	1979年7月18日夜、金銭トラブルから猟銃で相手家族4人を殺害。
60	木内芳雄	2008年6月24日午前6時頃、家族トラブルから一家4人をハンマーで殴り殺害。
61	加クチ山秀武	1989年8月13日、離婚話で妻と子ども4人を殺害。
62	原平	2005年2月27日午前、一家5人殺害。本人も自殺を図る。動機不明。
63	藤城康孝	2004年8月2日午前3時、家族への恨みから一家7人を牛刀で殺害。
64	少年	1992年3月5日午後、金銭目的で被害者宅に侵入。4人を絞殺、刺殺し、1人に怪我を負わせた。
65	ムアン	1987年2月8日午後6時頃、自宅で子ども3人を刃物で刺殺し、その後病院に入院していた妻を刺殺した。
66	朝倉幸治郎	1983年6月27日午後3時頃、引き渡しに応じなかった家に押し入り、家族5人を殺害、遺体をバラバラにした。
67	日高安政	1984年5月5日午後10時頃、作業員寮に放火して保険金をだましとろうとした。6人が焼死、消防士1人が死亡。
68	川俣軍司	1981年6月17日昼前、路上で母子3人が刺され死亡。主婦らも4人刺され、4人が死亡、2人が重軽傷を負った。
69	丸山博文	1980年8月19日夜、新宿のバスターミナルに放火。3人死亡、19人が重軽傷を負った。
70	覚せい剤密輸グループ会長	2000年3月2日早朝、敵対する暴力団が経営していたテレクラに放火。4人死亡3人がやけどを負った。
71	篠沢一男	2000年6月11日午後7時頃、金銭目的で、従業員や店長を縛り、目隠しをしたのち放火し6人を焼死させた。
72	山本開一	2003年12月14日午後0時頃、恨みを持っていた暴力団の事務所内で5人を射殺した。
73	高尾康司	2003年12月18日午前3時、面識のない家に放火。その家の4人が死亡。
74	梅川照美	1979年1月26日、銀行に金を出せと押し入り、5人を射殺、1人に怪我を負わせた。警察によって射殺された。
75	江成征男	2008年3月28日未明、経営者の男性が家族5人を刺して自殺を図った。
76	米沢俊信	2008年1月28日午前8時頃、夫が妻と二女を刺し死亡させ、長女と長男に怪我を負わせた。
77	鈴木勇雄	1990年9月25日夜、相続トラブルで、兄を射殺、妻子と警官に重傷を負わせた。

渡邊らの研究によると2人以上殺害の大量殺傷事件の発生頻度は、年平均39.2件、3人以上殺害の大量殺傷事件の発生頻度は、年平均8.3件であり、1991年～2005年の15年間に発生した2人以上殺害の事件の総数は、588件であるということであるので、実際には、この36年間で発生した事件はかなり多く、ここで抽出された77件はその中のごく一部に過ぎないと思われる。本研究はマスコミ報道された事件についての情報を分析しているので、マスコミによって報道されていない大量殺傷事件は分析されていないことに留意することが必要である。具体的には親子無理心中や育児ノイローゼなどからくる乳児殺（1つの場所で2名以上の乳児を殺害した場合、本研究では大量殺傷と定義される）などの事例は新聞報道されることが少なく、本研究の対象から漏れていると思われる。なお、同様の研究を行った渡邊らも実際に分析の対象としているのは、1973年～2005年までに発生し、特別捜査本部事件となった181件である。

3.4. 分析項目

これらの各事件について新聞記事の情報をもとにして、コーディングを行い分析用データベースを作成した。コーディング項目としては、犯人の属性の項目として、職業、学歴、家族状況、年齢、友人の数、借金の有無、リストラ・辞職、離婚、犯罪歴、犯行の特徴の項目として、凶器、犯行時間、犯行場所、被害者の数、被害者と加害者の関係、被害者を執拗に攻撃したか否か、証拠隠蔽、逮捕までの時間、計画性の有無、逃走準備、共犯、自殺の有無を用いた。

3.5. 基本的集計

次に日本における大量殺傷事件の特徴について、基本的な集計を行った。まず、殺害方法であるが、全体の50.6%が刺殺によるものであった。次いで、放火(13.0%)、身体的暴行(11.7%)、射殺(11.7%)、そしてハンマーなどによる撲殺(9.1%)となった。犯行時間については、一日のすべての時間帯でほぼ均等な発生状況であった。被害者と

加害者に事件前に接点があったケースは全体の70.1%であり、「無差別大量型」は29.9%であった。マスコミ報道のない事件の多くは知人間、家族間の事件であるので、実際の無差別大量殺傷事件の割合はさらに少なくなるとされる。全体の23.4%の犯人が事件後に証拠を隠滅しようと試みており、16.9%の犯人があらかじめ逃走準備をしている。事件をあらかじめ計画していた犯人は、57.1%であった。また、事件後に自殺したのは全体の22.1%であった。犯人のうち、60%は当日に検挙されており、翌日逮捕された11.7%を含めれば多くの事件は比較的早い解決を見ている。

犯人の属性についての集計であるが、犯人のうち、58.4%は無職、会社員・学生が27.4%をしめた。年齢層はすべての年齢層にわたっている。犯人の属性データについてはマスコミ報道を中心に集計したため、情報が得られない欠損値があるものの、それ以外のデータから見ると、この種の事件の犯人の典型的なプロフィールは、学歴は高卒(36.4%)、家族と同居(66.1%)、友達の数は少ない(84.0%)、借金はなく、離婚歴もリストラの経験もないということがわかった。前科率については、29.2%であった。

先行研究である渡邊ら(2008)は、大量殺傷事件を被害者と加害者の関係性を元にして3種類に分類している。そこで、次にこの関係性(家族、知人、面識なし)といくつかの項目についてのクロス集計を行ってみた。Table.2は、犯行場所との関連を示す。これら2つの変数には比較的高い連関があり。家族が被害者の場合、犯行場所は自宅(82.6%)、知人が被害者の場合、犯行場所は知人の家(90.0%)となり、大量殺傷事件では、被害者は自宅で殺害されることが多いことがわかる。面識なしの場合、路上(81.8%)が最も多かったが、これはいわゆる無差別大量殺傷事件のケースである。Table.3は、関係性と凶器の関係である。いずれの場合も刺殺が多く、これは日本の犯罪の典型的な傾向と一致している。Table.4は関係性と犯人の年齢層の関係である。最も多いのは40代であり、これは他の種類の殺人に比べ、若干高い

Table. 2 関係性と犯行場所

		犯行現場				合計
		自宅	知人の家	路上		
接点	家族	度数	19	4	0	23
		接点の%	82.6%	17.4%	.0%	100.0%
	知人	度数	0	27	3	30
		接点の%	.0%	90.0%	10.0%	100.0%
	面識なし	度数	0	4	18	22
		接点の%	.0%	18.2%	81.8%	100.0%
合計	度数	19	35	21	75	
	接点の%	25.3%	46.7%	28.0%	100.0%	

Table.3 関係性と凶器

		凶器						合計	
		刺殺	身体的暴行	撲殺	射殺	放火	その他		
接点	家族	度数	12	7	3	2	0	1	25
		接点の%	48.0%	28.0%	12.0%	8.0%	.0%	4.0%	100.0%
	知人	度数	16	1	3	5	4	1	30
		接点の%	53.3%	3.3%	10.0%	16.7%	13.3%	3.3%	100.0%
	面識なし	度数	11	1	1	2	6	1	22
		接点の%	50.0%	4.5%	4.5%	9.1%	27.3%	4.5%	100.0%
合計	度数	39	9	7	9	10	3	77	
	接点の%	50.6%	11.7%	9.1%	11.7%	13.0%	3.9%	100.0%	

Table.4 関係性と年齢層

		年齢						合計	
		10代	20代	30代	40代	50代	60代		
接点	家族	度数	1	3	5	10	4	2	25
		接点の%	4.0%	12.0%	20.0%	40.0%	16.0%	8.0%	100.0%
	知人	度数	1	5	7	9	4	4	30
		接点の%	3.3%	16.7%	23.3%	30.0%	13.3%	13.3%	100.0%
	面識なし	度数	3	7	7	5	0	0	22
		接点の%	13.6%	31.8%	31.8%	22.7%	.0%	.0%	100.0%
合計	度数	5	15	19	24	8	6	77	
	接点の%	6.5%	19.5%	24.7%	31.2%	10.4%	7.8%	100.0%	

Table.5 関係性と被害者数

		被害者数				
		2人	3人	4人	合計	
接点	家族	度数	2	11	12	25
		接点の%	8.0%	44.0%	48.0%	100.0%
	知人	度数	1	17	12	30
		接点の%	3.3%	56.7%	40.0%	100.0%
	面識なし	度数	1	5	16	22
		接点の%	4.5%	22.7%	72.7%	100.0%
合計	度数	4	33	40	77	
	接点の%	5.2%	42.9%	51.9%	100.0%	

Table.6 関係性と犯罪歴

		犯罪歴		合計	
		あり	なし		
接点	家族	度数	3	22	25
		接点の%	12.0%	88.0%	100.0%
	知人	度数	8	18	26
		接点の%	30.8%	69.2%	100.0%
	面識なし	度数	10	11	21
		接点の%	47.6%	52.4%	100.0%
合計	度数	21	51	72	
	接点の%	29.2%	70.8%	100.0%	

年齢である。ただし、面識なし型の場合、若干年齢層が低い傾向がある。Table.5は、関係性と被害者数の関連である。家族、知人の場合には被害者数が3人の場合がもっとも多いが、面識なしの場合には4人以上となる場合がもっとも多い。これは家族、知人殺の場合、犯行現場にそれほど多くの人が存在するわけでないのに対して、面識なしの路上殺人の場合、もともと多数の人間がいる場所で犯行を行うからだと考えられる。Table.6は、関係性と前科の関連であるが、全体の7割のケースでは犯人は前歴がなく、とくに家族殺の場合には全体の88.0%がそうであるが、面識なしの場合には前歴のある場合とない場合がほぼ半数ず

つ存在する。

3-6. 大量殺傷事件の分類

次に大量殺傷を類型化するために、分析に用いてきたデータセットに対して、多重対応分析(multiple correspondence analysis)を行った。分析は42回で収束し、第1次元のクロンバックの α 係数は0.785、固有値は3.782、第2次元の α 係数は0.646、固有値は2.537となった。カテゴリーポイントの結合プロットをFigure.1に示す。相関の高い項目同士が近傍に、相関の低い項目は離れてプロットされている。判別測定プロットを見ると、次元1は、おもに証拠隠滅、捕

まるまでの時間、共犯の有無、計画性、逃走準備などの変数と関連しており、事件の計画性-衝動性と関連していた。次元2は、被害者を執拗に攻撃する、犯人の年齢、職業、被害者数などに関連していた。各ポイント事件の帰結をもとに、これらの犯行パターンを3つのパターンに分類した。

すなわち、無差別殺人型、一家心中型、凶悪犯罪型である。Figure.1と同じ2次元上に、それぞれの事件（ケース）をプロットしたものをFigure.2にあげる。各タイプの事件の特徴と典型的な事件を整理すると以下のようになった。

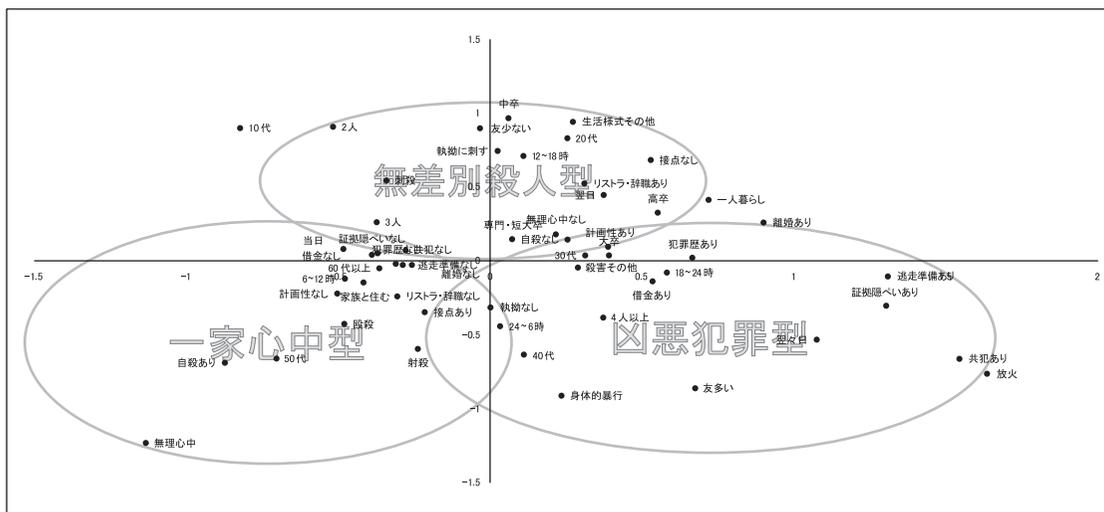


Fig.1 大量殺傷事件の空間的マッピング（犯行・犯人の属性）

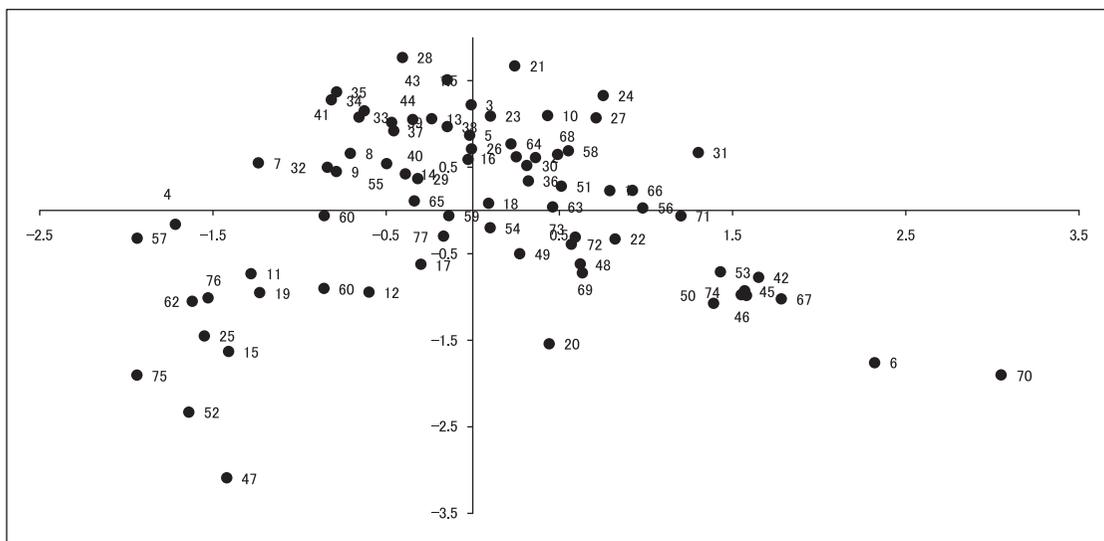


Fig.2 大量殺傷事件の空間的マッピング（ケースごと）

1) 無差別殺傷・強盗殺人型

犯人は日中、刃物を使用して、自分と面識のない人間を無差別に殺傷する。被害者は執拗に攻撃される。犯人は 20 代，中卒，無職かフリーター，派遣社員でリストラ，辞職などがきっかけの一つとなっている。無差別大量殺傷と強盗による大量殺傷が含まれる。

典型的な事件：

事件番号 2，本論文冒頭にあげたケース，2008 年 6 月午後 0 時過ぎ，秋葉原の歩行者天国にトラックで突っ込み，歩行者を連続してナイフで刺す。7 人が死亡，10 人が重軽傷。その場で警察官に逮捕される。

事件番号 21，2001 年 8 月北海道釧路市で下着・金銭盗の目的で自宅 2 件隣の家に侵入したところ，犯行を子どもに見られたことから包丁とカッターナイフで子ども 3 名を刺し，そのうち 2 名を殺害した。

事件番号 68，1981 年 6 月深川の路上で通行中の親子 3 人と歩行者 1 名を刃物で殺害，2 名を負傷させた後，中華料理店に立てこもった。突入した警察官により取り押さえられる。

2) 一家心中型

犯人は，夜間から午前中にかけて，自分と面識のある人間を殺傷する。犯人は逃走の準備はせず，犯行は衝動的である。逮捕される場合は当日。自殺する可能性もある。犯人は 40 代から 50 代の自営業である。

典型的な事件：

事件番号 52，三重県で 1980 年 1 月自宅で斧を使用して家族・親族 7 名を殺害し，3 名に重傷を負わせ，立てこもりの後，自殺したもの。

事件番号 75，東京都文京区で，2008 年 3 月，両親と妻，子ども 2 人の計 5 人を包丁で刺し 3 名を殺害した。自身は腹を包丁で刺したが死亡しなかった。

3) 凶悪犯罪型

犯人は，夕方から深夜 12 時にかけての時間帯に

共犯とともに殺傷する。事件は計画的で犯人は逃走準備をしており逃走する。証拠も隠蔽する。犯人は 30 代で犯罪歴，離婚歴がある。

典型的な事件：

事件番号 6，2003 年 1 月対立する暴力団の組長を殺害するため，前橋の Snackbar で銃を乱射，Snackbar 前で見張りをしていた男，客として居合わせた会社員の 2 人，パート職員（当時 60 歳）を射殺。元組長と店員の 2 人に重傷を負わせた。逃走後，潜伏先のフィリピンで逮捕。

事件番号 67，1984 年 5 月北海道夕張市で保険金を目的として，自らの経営する会社の寮に火をつけさせ，6 人を死亡させた。火をつけた従業員の自供により発覚して逮捕された。

4. 考察

本研究では，日本で発生した大量殺傷事件のデータを多重コレスポネンス分析によって分類したところ，無差別殺傷・強盗殺人型，一家心中型，凶悪犯罪型の 3 つのタイプに分類されることが示された。本研究で得られた結果は，同様の方法論で渡邊らが行った研究と類似している点もあるが必ずしも同一のものではない。渡邊らの「親族型」は，本研究における「一家心中型」とほぼ同様のものであるが，「面識なし型」については，本研究では「無差別・強盗型」と「凶悪犯罪型」に分離し，渡邊らの「知人型」に当たる事件は本研究では明確なクラスターを形成しなかった。この原因は，渡邊らの研究が警察データを対象に分析したのに対して，本研究では新聞データを基にしたため，対象とした事件が異なったためだと思われる。「無差別・強盗」と「凶悪犯罪」は新聞には非常に載りやすい事件であり，新聞データベースを分析資料の中心とした本研究ではその種の事件が相対的に多くなってしまった可能性がある。また，Holmes & Holmes (2001) や Fox & Levin (2003) の示したような細かな分類に対応するようなクラスターも形成されなかった。これは一見，我が国の大量殺傷事件にそれほど多いバリエー

ションが存在するわけではないということを意味するように思われるかも知れないが、実際には、彼らの分類自体が実際の犯人の行動のバリエーションに比べて細かすぎたという可能性もある。たとえば、越智 (2008) でも指摘されているが、Holmes & Holmes (2001) の分類のうち、The Disgruntled employee mass killer, The Disgruntled citizen mass killer, School shooter は、不満やストレスの蓄積という前提条件や過剰な武器を持ち、犯行は計画的で、無差別に殺傷し、犯行後自殺するという犯行パターンがきわめて似通っていることから、実質的にはひとつのタイプと考えられる。本研究でいえば全て「無差別・強盗型」にあたる。また、影山 (2008) の分類は精神の内面に関する変数に基づくものなので、外部から観察可能である変数をもとにして分類した本研究の結果とは一致しない部分も多いのは当然である。このような内面的な変数と行動変数の関連については大量殺傷犯人の動機の分析において重要な位置を占めるので今後も検討していくことは必要であろう。

最後に本研究における分類の問題点であるが、「無差別殺傷」と「強盗」という外見的には一見異なる行動が同じカテゴリーを形成してしまったということである。これらの2つのタイプは犯人の行動も異なってくる可能性があるが、本研究で取り上げた変数ではそれが明らかにならなかったということである。今後は分析に使用する変数を増やし、より適切なカテゴリーを作り上げていくことが必要であろう。いずれにせよ、より適切な分類を行うためには、さらに多くのケースと各ケースごとの事件情報、犯人の属性情報を収集して分

析を行っていくことが必要であろう。また、最終的には、このような分析は、犯行形態からの犯人の属性の推定や犯人の行動の予測のために用いられるものである。そのため、それぞれのタイプ分けがこれらの推定や予測にどの程度有用なのかについても引き続き検討していくことが必要であろう。

注

- 1) 本研究は日本心理学会第74回大会 (大阪大学) においてポスター発表された。

引用文献

- Bowers, T. G., Holmes, E. S., and Rhom, A. 2009 The nature of mass murder and autogrnic massacre. *Journal of Police and Criminal Psychology*, 59-66.
- Dietz, P. E. 1986 Mass, serial and sensational homicide. *Bull. N. Y. Acad. Med.* **62**, 477-491.
- Fox, J. A. and Levin, J. 2003 Mass murder: an analysis of extreme violence. *Journal of Applied Psychoanalytic Studies*, **5**, 47-64.
- Holmes, R. M. and Holmes, S. T. 2001 Mass murder in the United States. Upper Saddle River: NJ Prentice-Hall
- Hickey, E. W. 2010 Serial murderers and their victims. Belmont: Wadsworth/
- 影山任佐 2008 大量殺人事件の犯罪精神医学的研究 *犯罪学雑誌*, **74**, 166-181.
- 越智啓太 2008 犯罪捜査の心理学 化学同人
- 渡邊和美・佐藤敦司・吉本かおり・横田賀英子・和智妙子・藤田悟郎 2008 日本における大量殺人事件の発生状況と類型について *犯罪学雑誌*, **74**, 190-204.

《Summary》

Attributes and Behavioral Patterns of Mass Murderer in Japan (1)

OCHI Keita and KIDO Mayumi

In the present study, relations between the criminal styles of mass murder cases and the attributes of criminals were examined. Following reviews of former studies on mass murder cases, the actual mass murder cases in Japan were analyzed. Firstly in the analysis, seventy-seven mass murder cases which took place in the period between 1974 and 2009 were categorized on the basis of multidimensional scaling into three groups, that is, an “indiscriminate murder” type, a “suicide of an entire family” type, and an “atrocious crime” type.